

## 10. きき一発大ぼうけん

各務原市立尾崎小学校5年

孫野 友里 部田 晴香 野口 昇馬

浅野 愛 片桐 佑季

↓

敦賀市立松原小学校6年

中者 菜瑠奈

ある海の近くの町に、カイとユメがいた。

二人はおさななじみで、カイはぼうけんの隊長になるのが夢だけど、とても気が弱い。ユメは父がプロレスラーで、とても気が強い。夢はプロレスラーになることだ。

ある日二人は、いつものように海の近くのすなはまでぼうけんごっこをしていた。

「さあ出発だ」

カイがいきおいよく走り出したとたん、

「いたっ」

と、言った。

「大丈夫？」

ユメが心配そうにたずねると、カイは今にも泣きそうな顔をして、足をおさえた。ユメはその足を見て、

「何かにつまずいたの？ すっごい血が出てるよ」

と、言った。

ユメは、カイがつまずいた物をさがすために、あたりを見回した。すると、カイの後ろにわれかけたビンが落ちていた。

「あっ、このビンに血がついている」

と、ユメが言った。

カイはこのビンにつまずいたのだ。

ユメはビンの中に何かが入っていることに気づき、ビンを拾ってその中の何かを取り出して広げた。それには地図らしきものを書いてあった。

「何、これ。何かの地図？」

と、ユメが言うと、さっきまで泣きそうに足をおさえていたカイは、何ごともなかったかのように急に立ち上がって、

「ぼうけん？」

と、さげんだ。そしてまだユメが見ていたのに、地図をうばった。

その時、

ビリッ！

カイが地図をうばったせいで、地図がやぶれてしまった。

「もう、何やってんのよ！ やぶれちゃったじゃない」

「ご、ごめんなさい……」

「ごめんですむことじゃない！ それとさっきまで立てなくて泣きそうになっていたの、あれはうそだったの？」

ユメのきつい言葉に、カイはしばらくだまりこんでしまった。

ユメは、

「どうせ、うそなきでしょ」

と、小さくつぶやいて、やぶれた地図のかた方を海に投げた。

ちょうど顔を上げて、地図を投げたところを見たカイは、泣きながら海へ向かってさがしに行った。ユメは、

「ふうん。本当に泣いていたんだ」

と、あきれながらも、いっしょにさがした。

夕方になり、やっとカイが、

「あっ、あった！」

と、地図を見つけた。

ユメも一生けん命さがしていたので喜んだけれど、

「あーあ、これじゃ使い物にならないよ」

と、カイは泣き出してしまった。

それを見たユメは、

「仕方ないね……。でも、ぼうけんは楽しそうだし、行ける所まで行ってみようか」

と、言った。

その夜、ユメがカイの家に電話をした。

「もしもし、ぼうけんのことなんだけど、今からお父さんをつれて外に出られる？」

ユメがお母さんに見つからないように、こそこそと言うと、

「今ごはん食べてるから、八時ごろに浜辺で待ち合わせしようか」

「うん、それじゃあ八時にお父さんと浜辺に来てね、バイバイ」

「うん、バイバイ」

話し終わって二人は受話器をおいた。

カイもユメも、お母さんのいないところでお父さんをよびだし、八時に浜辺でぼうけんのことを話すことにした。

ユメのお父さんはプロレスラーなので、ユメにぼうけんに行ってもっと強くなってほしいと思い、大賛成した。カイのお父さんは、カイは気が弱いということを知っているので少しとまどっていた。カイは、

「僕は気が弱いから、それをユメに知られる前に早く治したいんだ」

と、言うとお父さんはカイの言葉に感動し、なみだをふきながら賛成した。そして七時五十八分になり、カイがお母さんに、

「ちょっとお父さんと星を見に浜辺に言ってくる！」

と、言った。

お母さんは、カイが初めてそんなことを言ったので、どういう意味がよく分からなかったけど、

「いってらっしゃい」

と、言ってげんかんまで見送り、首をかしげながら皿あらいを始めた。

カイとお父さんは、二分ほどで浜辺についた。

ユメとユメのお父さんはもう浜辺にいた。

「ごめん、待った？」

「ううん、私も今来たところ」

それからぼうけんのことについて話した。カイが、

「明日の早朝に出発したらどうかな？」

「早朝に出発しないとけいびの人がいるからね。でもカイ、起きれる？」

「う、うん、たぶん……」

カイは自信なさそうに言った。カイのお父さんが、

「おい、大丈夫か？ いつも七時に起きているくせに」

と、言うと、ユメはびっくりして、

「えっ、そんなにおそいの？ 私なんて朝五時に起きて、ランニングしているのよ」

得意そうに言った。その時、ユメのお父さんが固まっていたのにユメが気づいた。

「おーい、大丈夫？ 固まってるよ」

と、言いながらお父さんをゆらした。

しばらくたって、お父さんが走って家へ向かった。

お父さんは寒がりなので家に上着を取りにもどったのだ。

お父さんがもどってきてからみんなで計画を立てた。

「宝物は何かなあ。もしかして宝石かもね！」

カイがニヤニヤ笑いながら言うと、

「宝物を探すのが目的じゃないでしょ！」

ユメがおこって言った。するとカイが、

「じゃあ何が目的なんだよ？」

カイのお父さんは、

「それが目的だったのか？ お父さんは悲しいぞ」

と、いきなり泣きだした。ユメも、

「本当にみそこなったわ！ 本当にどうする気？ 計画がまだ決まっていないのよ！」

と、おこりだした。

ユメのお父さんは、ユメがおこるのはいつものことだと思って平気だったけれど、カイとカイのお父さんはユメがこわくてふるえていた。ユメは、

「もう、ふるえたりして！ 失礼ねー」

と、またおこった。

三分ほどたってカイとカイのお父さんのふるえがとまり、まともな計画決めが始まった。

「あっそうだ！」

と、カイがいきなり大きな声を出した。とつぜんの大きな声にユメは、

「何か思いついたの？」

と、目をかがやかせながら言った。するとカイが、  
「ユメは明日までにかんたんなプロレスを教えてもらって、僕は明日までにお父さんと  
いかだを作る。な、いい考えだろ！」

と、言った。ユメは、カイの意外な言葉に、  
「カイだって考えればいい考えが出るじゃん。いつもこうだといいいのに」  
と、つぶやいた。そしてお父さんに話しかけた。

「明日の早朝に出発するんだったら持ち物も用意しないとイケないし、かんたんなプロ  
レスも教えてもらわないとイケないからあとは電話で話そうか」

と、言った。カイは、  
「うん、そうだね、じゃあ電話してね」  
「うん、分かった、バイバイ」  
「カイはお父さんといかだをつくるのわすれないでね」  
「うん、分かった、バイバイ！」  
と、言って四人は帰って行った。

その日の夜、ユメはお父さんにかんたんなプロレスを教わった。  
カイ達が作ったいかだは、夜中の二時ぐらいに完成した。  
それからカイは持ち物をそろえた。

早朝三時五十七分に、カイは朝食をとってからお父さんと浜辺に行った。  
そして昨日お父さんと作ったいかだを海の近くに持っていった。

それからしばらくたってユメが来て持ち物チェックをした。ユメは、  
「わすれ物はない？ まずティッシュとハンカチ、おかし、水とう、べんとう、なわ、  
ふとん、ヘルメット。ちゃんと持って来た？」

「うん、OKだよ」  
「じゃあ、そろそろけいびの人達が来るから行こうか」  
「うん、そうだね」  
と、言って、二人はいかだに乗った。

そしてお父さんに手をふりながら、  
「行ってきます」

と、言うとお父さん達も、  
「気をつけるんだぞー」  
と、手をふりかえした。

お父さん達は、カイとユメが見えなくなるまで、手をふって見送った。☆

しばらくして、大きな島が見えてきた。ユメは、  
「わあー 大きな島！ わくわくするね」

と、カイに話しかけたが、カイは、少しビクビクしている。ユメは、

「もう、なにビクビクしてんのよ」

と、声をかけてみた。すると、カイは、

「だ、大丈夫だよ」

と、言った。でも、少しビクビクしている。二人が話をしているうちに、島に近づいていた。

二人は、いかだから下りて、島に入った。

ユメは、さっそく地図をひろげてみた。今二人が立っている場所は、大きな木の下だった。すると、ユメが、

「わあー これ、りんごの木じゃない！」

と、見上げてみると、カイの頭にりんごが落ちてきた。

「いたっ」

二人は、急いでヘルメットをかぶった。

二人がゆっくり上を見てみると、木の上にサルが登っていた。

おどろいて、カイがユメの後ろにかくれると、サルが木の上から下りてきて、二人におそいかかった。

「うきー」

すると、ユメはお父さんに習ったプロレスの技で、あっという間にサルをたおした。ききー発だった。

それから、二人はお弁当とおかし、そして、りんごを取って食べた。

「ふうー おなかいっぱい」

と、カイが言うと、

「じゃあ、もう行こうか」

と、ユメが言った。

二人がどんどん歩いていくと、川が流れていた。川には、橋がかかっていたので、二人は橋をわたった。

「あ〜！」

と、いきなりユメがさげんだ。カイがびっくりして、

「どうしたの」

と、きくと、ユメは、

「どうしよう！ ここから先は、海に落としたせいで地図がにじんでてわからない」

と、言った。

二人で考えていると、いつの間にか夜になっていた。カイは、

「こわいよ〜」

と、言った。さすがのユメも少しなやんでいる。

すると、向こうから大きなものがやってきて、びっくりしてさげんだ。よく見ると、それは大きなぞうだった。ぞうは、

パオーン

と、悲しげにないた。

すると、ゆめは、ぞうの足にすりきずがあることに気づいた。ユメは持っていたハン

カチで手当てをしてあげた。そうは、

パオーン

と、鳴いて、二人をせなかに乗せてくれた。

そうは、どんどん険しい道を歩いていった。

しばらくして、どうくつが見えてきた。どうくつの前で二人はそうからおりた。

「ありがとう！」

と、お礼を言った。そうは、もとの道をもどっていった。

二人は、どうくつの中にふとんをしき、あっという間に、ねむってしまった。

日がのぼるとともに起きて、どうくつから出た。

どうくつの前には、二羽の小鳥が飛んでいた。

小鳥が飛んで行く方向について行った。

しばらく歩くと、宝箱が見えてきた。二人は、

「わあ～ 宝箱だ！」

と、こうふんした。宝箱の前に行くと、二人は宝箱を開けようとした。

すると、ユメが、

「この宝箱、かぎがかかっている」

と、言った。カイは、

「え～」

と、がっかりした。

すると、カイが、

「あっ！ 手紙があるよ」

と、言った。そして、二人で手紙を読んできた。

「かぎがある場所のヒント『赤い花』」

「『赤い花』って何？」

「う～ん」

と、二人はなやんでしまった。そのとき、ユメが、

「あー、あそこにお花畑があるよ、きれい」

と、言った。そこには、ピンク色のチューリップが並んでいた。

するとカイが、

「もしかしたら、赤い花があるかもしれないね」

と、言った。

ユメもそう思い、二人で探しはじめた。ユメが、

「あーっ」

と、お花畑の真ん中を指差した。

カイが、急いでそこにいくと、真っ赤なチューリップがあった。

二人がチューリップの中をのぞいてみると、金色のかぎが入っていた。

「やった！」

と、二人は大喜びした。

そして、二人は宝箱のところにもどって、宝箱をあけた。

「わあ～ プロレスの道具がいっぱい！」

「わあ～ ぼうけんの道具がいっぱい！」

二人のほしかったものが入っていた。

二人は宝物をしっかりとって、もときた道をもどっていった。

いかだで二人は、ぼうけんに出発した浜辺に帰った。

すると、ユメとカイのお父さんが立っていた。

お父さん達は、二人が無事、元気に帰ってきたのを見て、感動して涙を流した。お父さんには、二人がたくましく見えた。

二人は、きき一発もあったけれど、ぼうけんでの出来事、二人で力を合わせて、宝箱を見つけた事などをほこらしげにお父さんに話したのだった。